



回された本



kou

はじまり

春は出会いと別れの季節。
色々な感情と、色々な思惑と、色々な方向性が示されて行く。

本も例外ではない。
僕は、二十代前半という遅咲きで読書の魅力に取り憑かれ、
現在を生きている。

さすがに二十代後半になってくると、それなりの冊数を読み込んだ。
それはミステリーであり純文学でありビジネス書でありSFであったりと様々だ。

何より変わったことは、友達や仕事関係、はたまた少し気になるあの子。
なんていう場で本の話題が気軽にかつ自然にでてきたことが変化だ。

そうなってくると僕の周りでは本の貸借、交換、譲渡、それらの行為が自然と成された。
僕も少なからず影響を受けた一冊、深夜に読んでいたら寝れなくなった、
貴志祐介「黒い家」を友達に薦め貸そうと思った。

この作品は「人はここまで悪になりきれなのか？」という人間の深い闇を戦慄に描いている。
そう、生きている人間の中に潜む、いつ直面してもおかしくない恐怖。
これを緩急つけた文体で、ぐいぐいと僕を引き込み、寝不足になった。

おわり

是非、この作品をその他大勢に広めようと思った。

まずは仲の良い友人に貸した。

数日後、電話で、

「深夜読むのは危険」

と、上々の評価だった。

だが、僕の本は彼に貸したままだった。

その後、僕もまた読みたくなり

「貸してた本返して」

と、さりげない口調で言った。

そうしたら友人が、

「いや、悪い。あまりに面白くて、〇〇に貸しちゃったよ」

友人は他に貸すのが当たり前のように言った。

そうしてこの時から僕の「黒い家」は、

知っている人に回るときもあれば、もちろん知らない人に回るという、

出口なき迷路に入りこんだのである。

ちなみに未だに「黒い家」は戻って来ていない。

むしろその一冊の本が、巡り巡って海を渡ったら面白い。

それで突然、僕のところに電話がかかってきて、出た相手が外人だったら尚良い。

「君の本らしいね、これ」

なんて気さくでウィットに飛んだ会話が繰り広げられそうだ。

まあ、なにはともあれ戻ってこないのであれば、

本屋に行って購入しよう。

そうしよう。